

くらしの声と願いで政治を動かす 政策のまとめ役 ふくま健治



市議会では毎回、質問に

議案提案、要望書、請願…国政・県政にも

市民の思いによりそって

わたしの道

働く母の姿見て

育った少年のころ

1955年（昭和30年）に生まれ57歳。小学生のときに父が病で倒れました。母が建設作業員として働き、兄、姉、わたしの3人を育てました。母のおかげで温かい思い出が残っています。母の荒れた手や疲れが、生活は質素で、わたしも新聞や牛乳配達、林業の手伝いをしました。母の荒れた手や疲れに姿に心いたみ、「こんなに働いて、なぜ貧乏なのだろう」と思っていたものです。中学、高校時代は陸上部に所属し、企業から陸上選手としてスカウトもあったのですが断わり、働きながら学ぶ日本福祉大学二部に進学、生まれ育った臼杵を離れました。



命のたいせつさを

考えた福祉大学時代

福祉大学を選んだのは、貧しさの原因や解決の道を探り、母への恩返しをしたいという気持ちが大きかったように思います。しかし、新聞配達に地下鉄工事、中華料理店と、働きながらの学生生活は想像以上につらく、苦しく、下宿のおばさんの胸で泣いたこともありました。同時に、生存権保障を求める堀本訴訟や朝日訴訟を知り、その支援にエネルギーをそそぎました。「人間らしく生きる」ことを学び、働く人が貧しいのは社会の仕組みそのものに問題があることに気づきました。その思いに共感した女性が、今は妻として、ともに支えあっています。そして、こうした運動の先頭に立っている人たちを知りました。それが日本共産党との出会いでした。

人間らしい権利を

求めて、活動の毎日

大学卒業後は、「大分生活と健康を守る会」に勤めました。大分市で生活するようになって30年を超し、すっかり大分市民になりました。「みなさんのために役立てば」と心しての毎日は、福祉制度のひどい現実とぶつかる日々です。人間らしく生きる権利は待っていてもやってはこない、市民のみなさんの命と健康、福祉、暮らしを守り充実させるよう全力をあげたいと決心しての大分市議会議員活動も5期になります。



国保税引き下げに県の支援を求め交渉

●地域のことをよく聞いて

暮らしの生活相談を受け、地域のすみずみで住民と懇談・対話。出された要求は現地調査、市交渉をすすめる、障害年金申請、浸水対策、交通安全対策、猪被害などスピーディーな対応に「こまったときには、ふくまさん」と地域住民からの声です。

●人権無視の生活保護行政をたどす

「せめて人並みに」、このささやかな願いを奪ってきた福祉行政。生活保護の重度障害者加算、障害者加算の認定漏れの審査請求は完全勝利。就労収入を改ざんし5年で約200万円の保護費の不支給という現実とたたかう裁判を支援し、弱いものいじめの福祉行政に立ち向かっています。

●「負担は限界」安心できる国保制度・介護保険に

「国保税の負担はもう限界」と切実な声ばかり。国保税値上げ中止署名の先頭にたち一般会計からの繰り入れを実現し値上げをおさえてきました。滞納を理由にした保険証とりあげ、差し押さえの不当性をたたきてきました。介護保険料の大幅値上げをおさえるため、積立金・基金活用を提案し値上げ幅を縮小。また施設整備の促進、低所得者への減免制度拡充にとりくんできました。

●子ども医療費無料拡大を

党議員団の代表として議案を提案。自民・公明・社民クなどの反対で議案は否決されましたが、「検討課題とする」との答弁をひきだしました。

●後期高齢者医療広域連合議会でも論戦をリード

09～10年、毎回の議会でも質疑と質問、討論をおこない、保険料の軽減対策、葬祭費の完全支給などを要求し、前進を切り開きました。

●国政・県政にも市民の願い届け、要求実現の突破口開く

県政要求では、粘り強いとりくみで、ひとり親医療窓口無料化に道を開きました。経済産業省では、原発事故対策を求め、市議会での提案も実り、大分市の防災対策に放射能汚染対策が盛り込まれました。国土交通省では、下水道管耐震化については「施設の使用期限に関係なく国庫負担の対象にする」との答弁を引き出しました。



経済産業省に、原発対策で交渉